

A—54 カップ法によるビタミンB群の微生物定量にかんする基礎的研究

(VIII) *Streptococcus faecalis* を検定菌とするカップ手技による葉酸定量法の有用性について

県立新潟女短大 ○稲越 徳子  
山田 雅子  
塚原 叡

1. さきに著者らは可及的に葉酸を除去した自家精製寒天の使用と葉酸定量時の至適検定条件の設定とにより本法の精度を著しく改善しうることを報告した。そこで今回は本法が果して葉酸の一定量法として実用に供しうるであろうか。この点を確認めるべく数種生物材料を供試してカップ法による葉酸定量を試み従来より実施されている比濁法と比較した。

2. 検定菌として *Stc. faecalis* R ATCC 8043, 定量培地として AOAC 組成を供し著者らの設定せる検定条件下でカップ法を実施しあわせて比濁法も行なった。供試せる試料からの検液の調製は岩井氏の方法に準じた。

3. 数種天然試料の遊離型葉酸および総葉酸量を測定しつぎの成績をえた。1)カップ法による数種植物性食品中の葉酸定量値は比濁法のそれとほぼ一致し、ドリフトもなく回収率は80-100%であった。2)動物性食品のなかにはカップ法による遊離型葉酸定量値が比濁法によるそれよりもやや低い値を示すものがあり回収率も同様の傾向を示したが、総葉酸量は両者による差異がなく、また、ドリフトや回収率も100%前後で良好であった。3)以上の成績は本法が葉酸の微生物定量法として実際上有用であることを示唆するもので、回収率やドリフトの不良な数種動物性食品については検液の調製に工夫を加えるならば正確な定量が可能となろう。